

第3章 京都大学病院構内 AG11区の発掘調査

伊藤淳史 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院西構内の西南部、鴨川の東方約150mに位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる(図版1-515, 図12)。今回、この地に京都大学(南部)基幹・環境整備(屋外排水施設)工事にともない、雨水貯留施設の新営が計画されたため、予定地について発掘調査をおこなった。調査期間は2023年11月13日から11月30日。調査面積は195㎡で、出土遺物総量は整理用コンテナ4箱。

一帯は、平安時代後期白河院の御所「白河北殿」の北辺地域に比定されており、構内東南域の19・39・122地点などでは、12世紀後葉以降の濃密な遺構・遺物のひろがりが見られる。しかし、それらは200地点までで、より西方では中世以前の成果は認められず、近世以降の耕地開発にともなう井戸や柵列、水路や路面などが検出される状況にある。調査地東北側の379・398地点の調査においては、江戸時代における聖護院村と吉田村の境界付近をはしる路面や水路が見つかり、17世紀代の構築と幕末期の廃絶が確認された。一方、東側隣接地を広く調査している349地点では、2枚の近世遺物包含層とともに、耕作関連の井戸や野壺、溝や柱穴列などが検出されているが、18世紀前半代までは遺物・



図12 調査地点の位置 縮尺：左1/5万，右1/5000

遺構とも散漫で、本格的な開発は18世紀後半以降との評価が下されている。すでに近年、419地点の立合調査などで、周辺に近世遺物の包含層が堆積していることは認識されつつあったが、その具体的な開発時期や過程を詳細に把握していくことが、今回の課題となるところであった。

調査の結果、現地地表下80cmに、近世遺物を包含する厚さ30cm程度の黒褐色土、その下部に20～30cm程度の淡褐色土の堆積を全域で認め、基盤となる砂礫層に達した。これらは、周辺調査区と同じ状況であり、西方への近世遺跡のひろがりという点について確実な知見を追加することとなった。同時に、基盤の砂礫層上面では、南北方向で幅がさまざまな溝群が検出された。これらの埋土からも染付磁器が出土し、18世紀後半以降の本格的開発という従来の想定をおおむね裏付ける成果が得られたといえる。

2 層 位

調査区北壁の層位を示す(図13)。基本的な層序は調査区全域で同じだが、北壁側は、調査前に植栽があった影響で、第1層とした大学設置以降の堆積とみられる表土・攪乱層が厚くなっており、調査区周囲の現地表面の標高は46.5m前後である。また、下部の砂礫層に西へ向かって落ち込む堆積が北壁では確認され、これらはa～dとして区別した。

以下、大学設置以前の堆積と見做せる第2層から下部について順に説明する。

第2層黒色砂質土は、調査区の北辺付近のみに薄く認められる堅く締まった堆積。下部の黒褐色土の上部よりやや砂が卓越している。調査区の東辺一帯は、この層も含めて表土除去後の面から下部はいずれも乾燥が早く、すぐに硬化する状況であったため、路面の存在も考慮されたが、舗装や造成をうかがわせる様相は確認できなかった。

第3層黒褐色土は、粗砂質で遺物や炭片などを多く含む堆積で、やや明るい色調の上部の3aと下部の3bに細分される。いずれも近世末～近代初頭ころの堆積で、ひろく病院西構内一帯の既往の調査で表土下に確認される土層である。

第4層灰褐色土は、上部の黒褐色土から下部の淡褐色土へ漸移的に移行する部分といえる。全域に明瞭に確認されるものではなく、土質としては黒褐色土と同様の堆積である。

第5層淡褐色土は、粗砂質で5cm程度大までの礫を少量交える堆積で、やや暗い色調の5aと下部の5bに細分される。5a層は、上部の黒褐色土や灰褐色土から漸移的に色調が移行している部分と考えられ、礫の含有がやや多くなるほかは、土質としては大差ない。遺物はごく微量だが染付磁器などが包含されているので、近世後半期の堆積といえる。

層 位

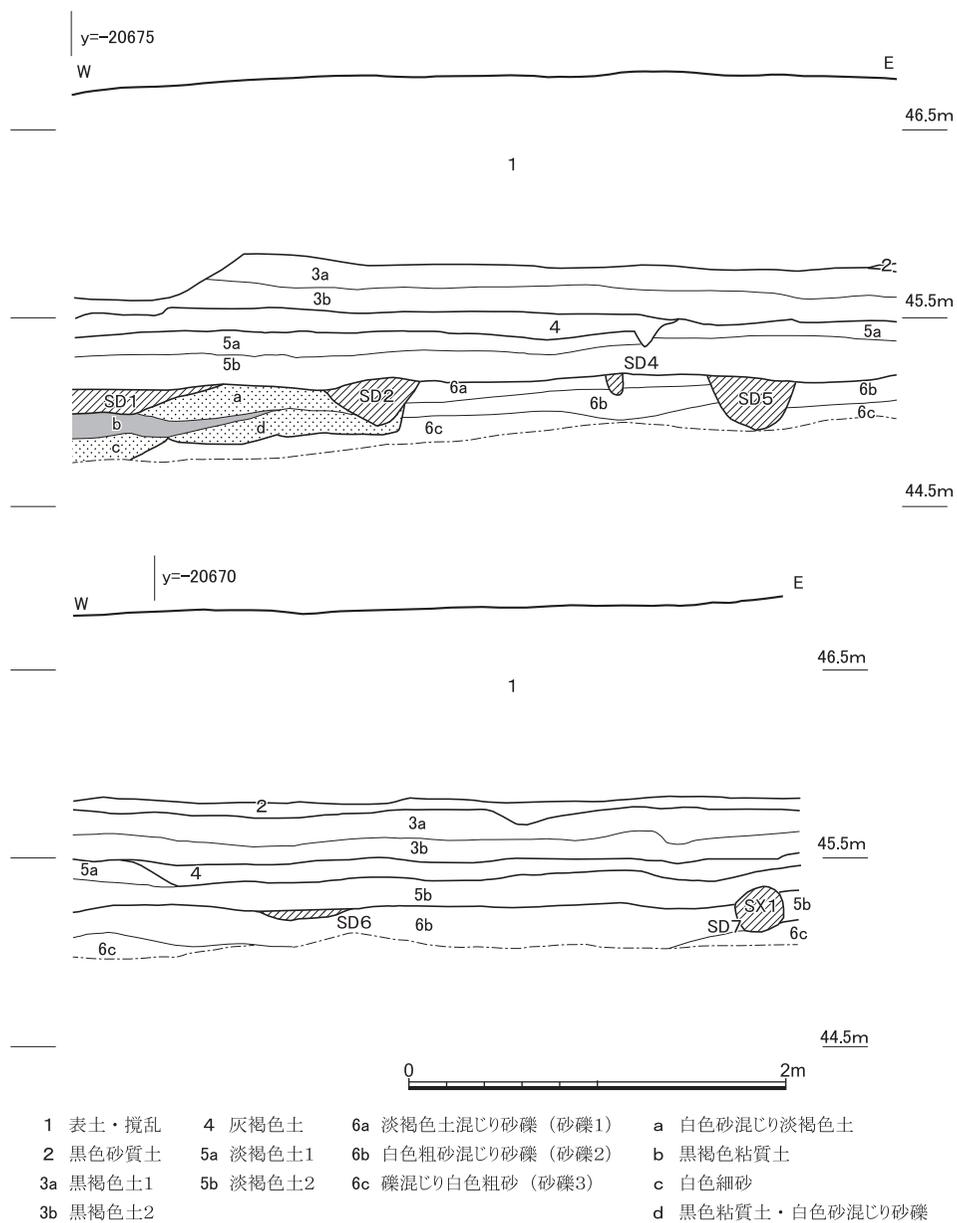


図13 調査区北壁の層位 縮尺1/40

第6層は調査地一帯の基盤となっている砂礫層で、粗砂や土、10cm程度大までの礫のいずれが主体を成すのかの相違で6 a・6 b・6 cに細分しているが、一連のものであろう。磨滅した土師器や陶器類の細片を微量認めることができる。調査地一帯に鴨川の流れが及んでいた中世以前に形成されたものと考えて良いだろう。

以上のほか、今回は西壁際で西へ落ち込む堆積を確認することができ、a～dとした。ここで注目されるのはb黒色粘質土で、上下の粗砂や砂礫層の中間に10cm前後の厚さで濃密に堆積する（図版5-3）。基盤の砂礫内でこのような粘質土は、近接する調査地では確認されていない。鴨川の流れからの離水前後に安定化していく過程で、浅い淀みのような湿地帯が形成されていた様相がうかがわれよう。なお、包含遺物は確認されなかった。

3 遺 構

調査では、表土・攪乱除去後の黒褐色土上面、黒褐色土除去後の淡褐色土上面、淡褐色土除去後の砂礫上面の3面で遺構検出をおこなった（図版4・5）。ここでは、大学敷地となる以前の遺構と判断される淡褐色土上面と砂礫上面の2面で検出された遺構についてそれぞれ図示し、説明する（図14）。なお、調査区東北角付近は、銀杏巨木の根株が基盤の砂礫層より深くまで及んでいたため、除去できずに調査を断念している。このため東北角のみ調査範囲が不整形に狭まっている。

淡褐色土上面では、遺構は希薄であり、野壺SE1のほかは、一辺が10～15cm程度の方形の小ピットと、それよりやや大きめの方角や円形のピット若干が検出されたにとどまる。SE1は、径1.5m程度の漆喰製井筒で、深さは淡褐色土上面からは60cm前後をはかる。ただし、表土除去後の黒褐色土中からすでに輪郭があらわれており、本来はより深さのあるもので、時期も新しいものであったと判断してよい。黄色の粘土と漆喰の残骸で埋没しており、陶器の土瓶（Ⅲ45）ほぼ1個体分が出土している。大学設置以降の遺物は含まれていないので、その段階では廃絶していたのだろう。

方形の小ピットは、農耕関連の柵列などの痕跡かとみられるもので、これまで周辺の調査では、深さもあり並びが確認ができるようなものが多数確認されてきていたが、今回は浅いものがほとんどで、並びは確認出来なかった。それ以外の方角や円形のピットでは、調査区の南壁際で、径30cm程度の円形で深い掘り込みをもち、内部に円礫を充填するようなピットが3基検出され、攪乱で1基滅失していると想定すると1.8m間隔で東西の並びを想定できることから、SA1とした。建物か柵列かは不明である。また、方形で一辺が

遺 構

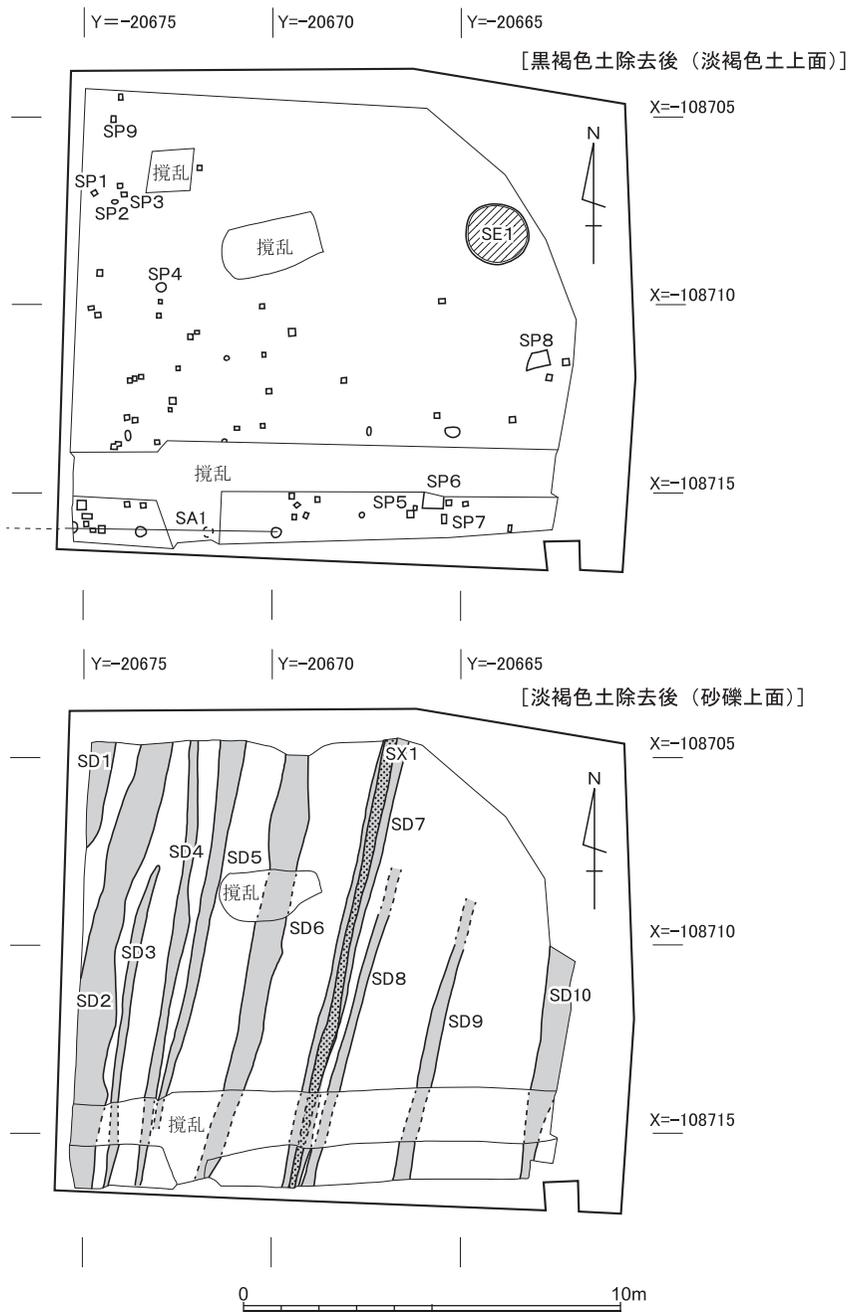


図14 調査区検出の遺構 縮尺1/200

60cm程度をはかり、内部に礫が詰まっている遺構SP6やSP8については、既往の調査でラチス状遺構と称されて列を成して検出されるような遺構に類するものと思われるが、今回はこのようにまばらに把握されるにとどまっている。

砂礫上面では、方位を真北から東に振る南北溝SD1～SD10が検出されたほか、小礫による畝状の高まりSX1が、溝と同方向に淡褐色土中で確認された。

南北溝は、幅・深さとも10cm程度の浅く不鮮明なものから、幅は最大で1m近くになるSD2やSD6など、規模がさまざまである。調査区西辺をはしるSD1やSD2は、下部に見出されている砂礫の落ち込みの埋積過程で生じたものともみることができ、粗砂混じりの淡褐色土を埋土として30cmあまりの深さがある。一方、SD6は、幅は広いが礫混じりの淡褐色土を埋土とした10cm程度の浅いものである。SD10は、調査区東壁際に検出されたため、全容を明らかにし得なかったが、淡褐色土を埋土として明瞭な輪郭と掘り込みをもつものであった。

小礫による畝状の高まりSX1は、最大で幅・高さ30cm程度の規模になるように、5cm程度大の小礫を密にまとめた列状の集石で、淡褐色土中において、南北溝群と同様な東に振る方位で南北にはしるように検出された(図版5-2)。断面での所見も加味すると、砂礫上面に積み上げて構築されているのではなく、淡褐色土中で溝を掘り込むようにしてその内部に小礫を充填したものであると判断される。集石の下部より同一方向にはしるSD7が検出されており、一連の遺構であった可能性が高い。集石中には近世の陶器片や瓦が一部に混じっていた。耕作にかかわる湿気抜きや排水を意図したものであろうか。

以上の溝群や集石からは、少量ではあるが染付磁器を含む遺物が出土しており、近世以降に形成された遺構群であったとみてよからう。これは、隣接する既往の調査地で検出された類似遺構に関わる所見とも一致する。明確な根拠を得てはいないが、耕作にともなう鋤溝というよりは、一帯が耕地として開拓される過程における耕起や地盤改良にともなう痕跡ではないかと想定している。また、方位がいずれも東に振っていることは、鴨川から離水して時間を経ていない段階において、北東-南西へ流下する流れが前段階で卓越していたのであろう一帯の地勢を反映しているのではないかと推察しておきたい。

4 遺物

基盤の砂礫層から出土する磨滅した遺物には、図化に耐えるものがない。多くが土師器片で、中世以前のもののみられ、染付磁器など明らかに近世とみるものは含まれない。こ

ここでは、それより上部の遺物包含層である淡褐色土と黒褐色土、およびそれらを埋土とする遺構出土遺物を抽出して呈示する（図15・16）。

淡褐色土出土遺物（Ⅲ1～Ⅲ4・Ⅲ17～Ⅲ22） 包含される遺物は少なく、また残存率も悪いものが多い。Ⅲ1～Ⅲ3は土師器皿。いずれもかろうじて1/12程度残存するもの。Ⅲ1とⅢ2は見込みに圈線をもつもので、口径10cm内外。Ⅲ3はそれらより小ぶりで偏平な皿。Ⅲ4は陶器の灯明皿。内面に透明釉がかかり、平行な細線が施される。Ⅲ17～Ⅲ19は陶器で、それぞれ、甕口縁、土瓶の肩部、茶入れなどの下半部か。Ⅲ19は回転糸切底に「仁清」の刻印がある。

黒褐色土出土遺物（Ⅲ5～Ⅲ16, Ⅲ23～Ⅲ35） Ⅲ5～Ⅲ8は土師器皿。Ⅲ5は直線的な器形で口径14cmをはかり、見込みの圈線がわずかに残存している。Ⅲ6・Ⅲ7は口径10cm足らずで、やはり見込みに圈線をもつが、Ⅲ7は著しく扁平な器形となる。Ⅲ8は口径5cm強の小皿。Ⅲ9は「つぼつぼ」と呼ばれる小型品で、口径3cm足らず。口唇部は狭いが面をもっている。白色を呈するが、胎土は精良さをやや欠いて、仕上げも粗雑な雰囲気がうかがわれる。

Ⅲ10～Ⅲ16は陶器の灯明受皿や灯明皿。いずれも口縁部から内面側に透明釉がかかる。法量では、灯明受皿は口径7～8cmのものと11cmの2つに分かれるが、灯明皿は12cm前後のみが認められる。

Ⅲ23～Ⅲ28は陶器。このうちⅢ23・Ⅲ24は軟質施釉陶器で、径3cm前後の極小で外面のみ施釉の蓋。Ⅲ25～Ⅲ28は明らかに蓋形のもの（Ⅲ25・Ⅲ27・Ⅲ28）とともに、大きめの

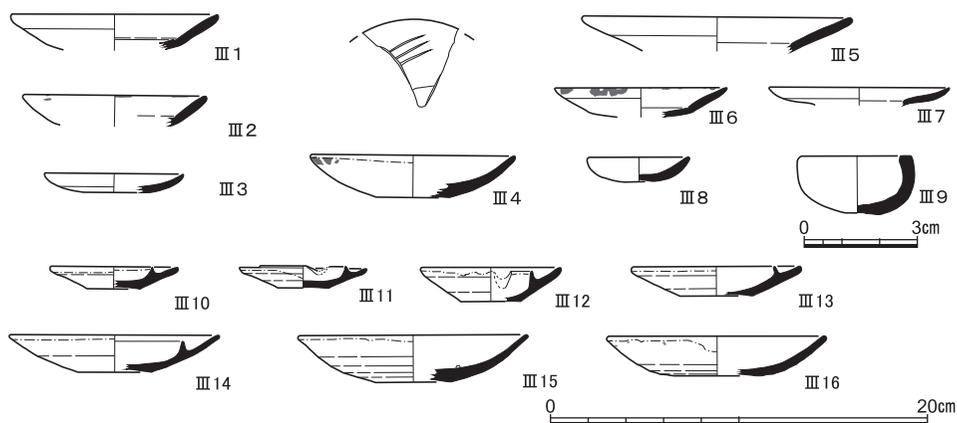


図15 淡褐色土出土遺物(1) (Ⅲ1～3土師器, Ⅲ4陶器), 黒褐色土出土遺物(1) (Ⅲ5～Ⅲ9土師器, Ⅲ10～Ⅲ16陶器), Ⅲ9のみ縮尺1/2

鉢や皿の底部かとみられるⅢ26もある。Ⅲ29～Ⅲ35は磁器。Ⅲ29は内外とも厚く施釉され貫入も著しい小椀。Ⅲ30やⅢ33は薄手で口縁部が大きく外反する。Ⅲ33には金継ぎが認められる。Ⅲ31は外青磁の筒形椀。Ⅲ32は色絵である。Ⅲ34・Ⅲ35は白磁の紅皿と称される製品で、Ⅲ34は口径4.6cmで皿形、Ⅲ35は口径2cmの椀形。

S X 1 出土遺物 (Ⅲ36～Ⅲ39) Ⅲ36は土師器皿。見込みの圏線は残りが悪く判然としない。Ⅲ37は陶器の椀。高台の内側も含めて前面に淡黄色の釉がかけられている。Ⅲ38は陶器すり鉢の口縁部。暗赤褐色を呈し、端部は縁帯状に肥厚する。Ⅲ39は磁器で小さく突出気味の底部。底面と見込みは露胎。

S D 2・S D 3・S D 10 出土遺物 (Ⅲ40～Ⅲ43) 砂礫上面で検出された溝群の埋土中からの出土遺物である。Ⅲ40は京・信楽焼系の陶器椀の底部かとみられる。Ⅲ41は磁器染付の皿。Ⅲ42・Ⅲ43は土師器で、Ⅲ42は皿。Ⅲ43口縁が鏝状に外反する鉢。

S P 6 出土遺物 (Ⅲ44) 淡褐色土上面で検出されたピット内からの出土遺物。陶器の底部。徳利の下半部であろうか。内面にはミズビキ痕が顕著で、内外両面とも全面に鉄釉がかかる。

S E 1 出土遺物 (Ⅲ45・Ⅲ46) 黒褐色土中で確認された漆喰製野壺の埋土からの出土遺物。Ⅲ45は陶器土瓶で、ほぼ完形に復元できるように破片が一括出土した。器壁は極めて薄い。「萬屋横丁」かと読めるような文字が釉描されている。Ⅲ46は泥めんこ。

5 小 結

以上に報告したように、今回の調査区においては、おおむね18世紀代以降の遺構・遺物とともに、安定した遺物包含層の堆積が確認された。その頃より土地条件の安定化にともなう開発が本格化していったことがうかがわれる。こうした状況は、東～北側隣接地一帯での既調査地点における所見と、時期的な細部についての異同は検証を重ねる必要があるものの、齟齬のない成果である。より鴨川に近い西側一帯にも同様な状態がひろがっていることが明瞭になったといえよう。立合調査ではあるが、今回よりも西に位置する419地点においても、近世遺物包含層の確認が報告されているので、同時期の遺跡のひろがり、さらに西方へと及んでいる可能性も高いとみるべきだろう。

ただし、今回の出土遺物は整理箱4箱にとどまっており、調査面積の狭小さを考慮しても、減少傾向がうかがえる（東接する349地点では2164㎡で123箱）。そして、淡褐色土上面で検出される遺構もまばらであった。周辺部的な様相が顕在化している、と評価する

小 結

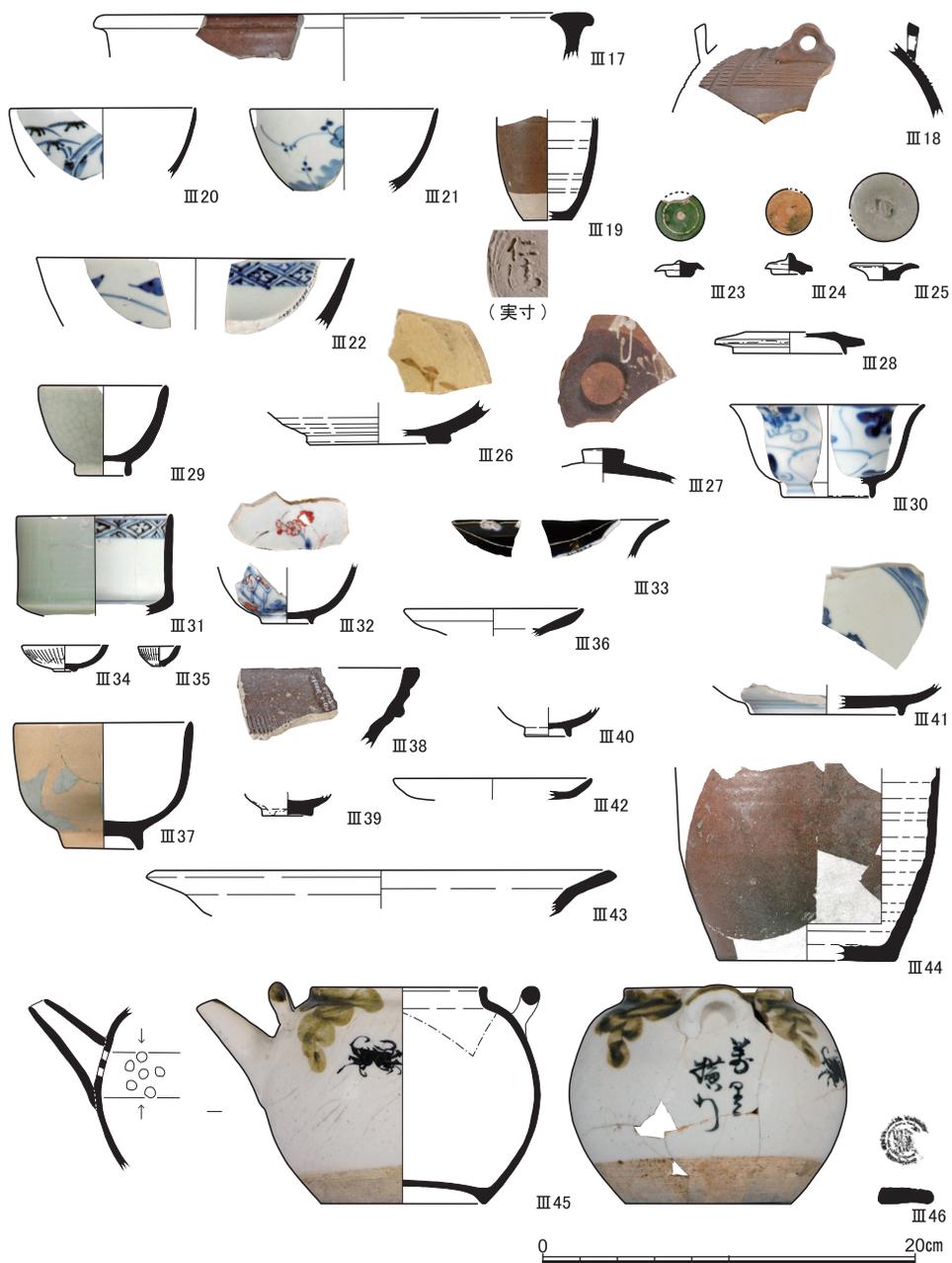


図16 淡褐色土出土遺物(2) (Ⅲ17~Ⅲ19陶器, Ⅲ20~Ⅲ22磁器), 黒褐色土出土遺物(2) (Ⅲ23~Ⅲ28陶器, Ⅲ29~Ⅲ35磁器), S X 1 出土遺物 (Ⅲ36土師器, Ⅲ37・Ⅲ38陶器, Ⅲ39磁器), S D 2 出土遺物 (Ⅲ40陶器, Ⅲ41磁器), S D 3 出土遺物 (Ⅲ42土師器), S D 10出土遺物 (Ⅲ43土師器), S P 6 出土遺物 (Ⅲ44陶器), S E 1 出土遺物 (Ⅲ45陶器, Ⅲ46土製品)

こともできよう。なお、今回調査地の北西120m程度に位置する稲森財団記念館建設時の立合調査所見で、安定した耕作土層ではなく水成堆積層の確認にとどまったことから、鴨川に築堤がなされない「遊水池」的な空間に相当した可能性が指摘されている〔千葉2022 p.57〕。今回、調査区西辺で、下部の砂礫層内に黒色粘土層や砂層を介在させる落ち込みが確認され、浅い淀みのような環境が一部の離水過程で生じていた可能性に言及したが、このような遊水地の一端が、ある段階には及んでいたものかもしれない。いずれにせよ、こうした課題は、さらに西方での調査所見を蓄積することで、解決に向かうことになる。

その後の調査地一帯は、幕末期の文久4年（1864）における会津藩副邸地の設定と洋式練兵場としての利用、維新後の牧畜場への移行を経て、明治45年（1912）年に附属病院敷地となる履歴が知られている。現状では、これらとしての利用痕跡を遺構で認識できていないが、周辺で広域に検出できる厚い黒色系の近世遺物包含層の生成要因とともに、今後多面的な検証を行っていくことも課題となろう。

今回の調査と本章の作成は、伊藤淳史が担当し、長尾玲・磯谷敦子・河野葵が補助した。

執筆は、長尾との協議を経て伊藤がまとめた。調査中、堆積層の理解については辻康男氏（株）パレオ・ラボ）に種々ご助言いただいた。末尾ながら御礼申し上げる。